

# 2022年度博士論文題目及び要旨



# 団地高齢者が「住み慣れた我が家で暮らし続ける」ための 「出張暮らしの保健室」に関する研究 ～訪問看護師と福祉職の協働による効果的支援モデルの提案～

船 津 元

Research on Shutchō Kurashi no Hokenshitsu (Local Nurse's Office as outreach program.) for elderly people in housing complexes to continue living in a familiar home.

-Proposal for effective support model through collaboration  
between visiting nurses and welfare workers -

Hajime Funatsu

## 要旨：

【背景】国は高齢者が住み慣れた地域、我が家で安心して暮らし続けられる社会を目指し、地域包括ケアシステムと要となる多職種連携の構築を提唱した。こうした中、都市近郊の団地に拠点を置き、在宅医療の推進を目指し、訪問看護師を中心とした専門職によるよろず相談所「暮らしの保健室」の活動が目ざされ客観的な評価が期待されている。

【目的】T市の「出張暮らしの保健室」の活動を多職種連携の一形態と捉え、実践家参画型評価であるCD-TEPの手法を用いて1次効果モデルを提案する。実践家により改善されたプログラムは、多職種の連携を高め当活動が地域医療・福祉の支援プログラムとして継続的に運営されて行くことを検証する。

【分析方法】CD-TEP法の12ステップの6ステップを実施し、その中核となるニーズ調査、グッドプラクティスインタビュー、実践家ワークショップにより1次効果モデルを構築し、改善されたプログラムが継続的に運営されることを検証した。

【結果】プログラムが目的を達成するためには、高齢者が「医療職と繋がる」「安心の場」「学びの場」となり「多職種が連携を強める」、「かかりつけ医が参画する」5つの近位アウトカムが必要とされた。改善したプログラムは、インパクト理論、サービス利用の流れ、必要な組織、効果的援助要素を明確にし、他地域での実践を可能にするマニュアルを作成することで可視化された。多職種協働により改善されたプログラムが団地高齢者に対して継続的に実施されていることを検証した。

【考察】改善されたプログラムは、医療職、福祉職協働でのアウトリーチ手法により団地高齢者のソーシャルキャピタルを高め、ワークショップによる対話により多職種がトランスディシプリナリチームを形成することに寄与した。高齢者のニーズに沿ったプログラムの継続は、高齢者自身が将来に対する意見を持ち住み慣れた地域で暮らし続けることへ自信を高めることに貢献すると思われる。